地理の授業における活用例

～ 地理・世界史・ＨＲでの実践から ～

長野県長野東高等学校　大　倉　宏　夫

１．実践の概要

(1)　はじめに

実践２年目となる本年度は、昨年度の反省から、２ヶ月間に８社の新聞を利用するのではなく、約半年に渡り、毎月２社ないし３社の新聞を活用する方法で実践をした。

昨年度同様、できる限り毎日、授業やＨＲに新聞記事を利用できるように試みた。以下は、その実践例である。

(2)　実践教科・科目等

①　地　理（３学年選択・４単位・１講座）

短大・専門学校・就職の生徒が大部分の講座である。

学習範囲に関連する記事をさがし、授業に利用した。また、学習している単元とは関わりなくとも、世界の国々のタイムリーな出来事や現状、国際関係、日本や長野の地理関連記事があれば、ピックアップして授業に活用した。

生徒が、個人レベルの生活・思考だけではなく、地域や自国、国際社会にも視点を置き、グローバルな視野での考察をすることが少しずつでもできるようになれば、というねらいである。

②　世界史（３学年選択・４単位・１講座）

３年生の選択世界史は、古代から近代前史までを学習する。この講座は、大学受験対応講座であり、11月下旬からは入試対策を中心とした授業展開をしている。しかしその中で、新聞の国際面や社会面などを利用して、受験に関係あるないに関わらず、世界の問題や現状などについて生徒に考えさせる機会を持った。そのねらいは、上述の地理同様である。また、世界史が、“あくまでも過去の出来事であって、暗記科目なのだ”という生徒の思いを再考させることもねらいに含めた。

③　ＨＲ（３年ＨＲクラス・ＳＨＲ毎日９時45分～、ＬＨＲ木曜６限）

毎日のＳＨＲの時間に、新聞記事を読ませることを試みた。諸連絡の後、新聞からピックアップした記事（こちらで別資料を追加したり、書きこむ場合あり）を配布して読ませる。その後、必要に応じて解説をする。時間がない場合は、記事を読むだけにして、翌日解説する場合もあった。卒業後、社会に羽ばたく三年生にとって、新聞を通して、社会に関心をもち、少しでもその社会とのつながりを感じることを期待して実施した。また、小論文・作文・面接など、進路指導面からも有効であると考えた。

2．新聞の置き場所・整理方法

置き場所は、私が担任をしている、3年のＨＲ教室である。各社ごとにわけて配置してある。生徒には、時間のあるときにはいつでも閲覧できるようにしてある。また、他クラスの生徒にも同様である。約半年間、そのまま教室に置きつづけた。昼休みなど空き時間には、生徒は友達どうしで新聞を広げて記事などを読んだりしており、それなりに活用できたのではないかと思う。

3．実践の内容

本年度１年間を通しての実践例の中から、地理の一例を報告する。

地理の授業における実践例

３年選択地理講座では、以下のように活用した。

[１]新聞記事を単元授業の副教材的ポジションに据えて活用する方法。

[２]すでに学習した、あるいは今後学習予定の内容と関連する新聞記事をピックアップする方法。

[３]世界の国々に関する新聞記事を、授業に関わらなくともピックアップする方法。

いずれの場合も、

- ピックアップした国の位置、首都などを確認する。(「地図帳」利用)
- ピックアップした国の特徴をおさえる。(「データブックオブザワールド」利用)
- 既習事項の場合は、復習をあわせて行う。
- [３]の場合には、細かな解説を加えて、一般的知識・教養の修得と国際的な視野・思考力を養う。

【実践例】

- 単元「第１章 地球の自然環境と人間生活　２節 世界の気候環境」
  「Ⅱ 世界の気候区分 … 熱帯気候地域の自然と生活」

授業時間２時間を配当して、ケッペンの気候区分に従い、熱帯気候区についての学習を実施した。

- １時間目 … Ⅰ．熱帯気候区の特徴の復習
  Ⅱ．「ソロモン諸島」の自然と生活
  Ⅲ．「ミャンマー連邦」の自然と生活
- ２時間目 … Ⅰ．「インドネシア」の自然と現状
  Ⅱ．「カリマンタン島」の自然と生活

- ねらい … 学習した熱帯気候区の特徴について、具体的に三つの国を取り上げて理解を深める。三国の自然と人々の生活について学ぶことを通して、熱帯の自然環境が人間生活に及ぼす影響を理解させる。また、熱帯地域の開発と人間生活の変化、現状と問題点についても考察させる。

・授業展開

【1時間目】

	学　習　活　動	留　意　点
導入	Ⅰ．熱帯気候区の特徴を復習する ・ケッペンによる区分の復習 ・熱帯気候の気温と植生、土壌の復習	・地図帳を用いて、熱帯気候区の分布地域を確認させる。
展開	Ⅱ．「ソロモン諸島」の自然と生活の学習 ◇「ソロモン諸島」という国について、熱帯気候地域であること、その地勢、歴史、日本との関わり、現状等について多角的に学習し理解させる。 ・国の場所と、熱帯気候区であることの確認 ・【資料①(新聞記事)】を読む ・治安の悪化について ・ＰＩＦとは ・【資料②(『ジパング』より)】を読む ・太平洋戦争について ・ガダルカナル島の戦い ・【資料③(学習まとめ用プリント)】で、ソロモン諸島についてまとめる	・地図帳で国の場所を調べさせ、白地図に色ぬりして確認させる。 ・なぜソロモンで治安が悪化しているのか、ＰＩＦとは何かについて理解させる。 ・ガ島戦とは何かについて触れ、その意味と悲惨さについて理解させる。 ・表については、地図帳で調べさせる。 ・今時限に学習したことをまとめさせる。
	Ⅲ．「ミャンマー連邦」の自然と生活の学習 ◇ミャンマーについて、熱帯気候地域であること、その地勢、歴史、日本との関わり、現状等について多角的に学習し理解させる。 ・国の場所と、熱帯気候区であることの確認 ・【資料④(新聞記事)】を読む ・軍事政権であること ・民主化運動について ・アウン・サン・スー・チー ・【資料⑤(学習まとめ用プリント)】で、ミャンマー連邦についてまとめる	・地図帳で国の場所を調べさせ、白地図に色ぬりして確認させる。 ・記事を用いて、現状と民主化の動きやそれに対する国際社会の対応、日本との関係について発展学習し、理解を深めさせる。 ・表については、地図帳で調べさせる。
まとめ	◇「ソロモン諸島」「ミャンマー連邦」ともに、生徒にとってはほとんど馴染みのない国である。しかし、熱帯気候地域の、歴史的にも日本と深い関係のある2国であり、国際社会においても関心の高い重要な国であること、そこに生活する人々について再認識させ、まとめとする。	

【資料 ④】

スー・チーさん拘束に防御法10条a項

近日中の解放は絶望

【バンコク＝吉形祐司】ミャンマーの民主化運動指導者アウン・サン・スー・チーさんの拘束問題で、同国軍政に強いパイプを持つ消息筋は二十九日までに、スー・チーさん拘束の根拠として、「国家防御法一〇条a項」が適用されていることを明らかにした。この規定は、治安維持などを理由に最大五年半の拘束を可能としており、近日中のスー・チーさん解放はほぼ絶望的との見方が強まっている。

一九七五年成立の同法の趣旨は、国家主権や治安に対する脅威を阻止することだが、非常事態宣言の発令や、必要に応じて基本的人権を制限することもできる。

この規定によれば、国家に脅威を与える恐れのある人を六十日間拘束することを可能としているが、必要なら百八十日までの延長、閣議決定を経てさらに五年の拘束延長が可能だ。

スー・チーさんが軍政に拘束されてから三十日で一か月。軍政は当初、「保護的な拘束」「一時的な拘束」としていたが、これが一時しのぎの弁明だったことは決定的となった。

スー・チーさんの計七年半にわたる自宅軟禁では一〇条のうち「行動制限」を規定したり項が適用された。今回、自宅以外の施設における身柄拘束を可能とするa項を適用したことは、スー・チーさんの人気に対する軍政の強い危機感を物語るものだと言える。

一方、スー・チーさんの身柄解放を要求する国際的な声の高まりに対し、二十八日付のビルマ語国営紙「チェモン」などは、「外交に内政干渉の権利はない」とする社説を掲載。特に当局の制止を振り切り、スー・チーさんや、最大野党の国民民主連盟（NLD）のティン・ウ副議長の自宅を訪れようとした外交官を批判した。

在ヤンゴン消息筋によると、二十九日付のチェモンは、スー・チーさん拘束時の混乱が政府の計画的な襲撃で、多数が死傷したとする英BBC放送の報道を非難。ここ一週間の論調は、西洋外交団や外国メディアへの対決姿勢を鮮明にしており、状況的には「スー・チーさん解放は、気配も望みもない」（同筋）という。

【資料 ①】

ソロモンに多国籍軍

治安悪化で 豪など2000人規模派遣へ

【シドニー＝平井道子】オーストラリア、ニュージーランドや太平洋の島しょ国十六か国・地域による太平洋島しょ国フォーラム（PIF＝▱＝）は三十日、シドニーで外相会議を開き、治安が悪化しているソロモン諸島に豪、ニュージーランドの軍隊などによる二千人規模の平和維持部隊を派遣することを全会一致で合意した。ソロモン諸島政府が週内に平和維持部隊派遣の正式要請を閣議決定するのを受け、七月下旬にも派遣する。人口四十六万人のソロモン諸島では、首都ホニアラのあるガダルカナル島で地元民とマライタ島からの移住民との対立が絶えないのに加え、財政難から警察が機能せず治安が一気に悪化した。

【資料 ⑤】

熱帯気候地域の学習 例②

ミャンマー連邦【　　】

- 1948年、イギリスから独立　74年～社会主義　88年～【　　】
- ベンガル湾に面した南部は熱帯モンスーン気候【　　】
  内陸部は温暖冬季少雨気候【　　】

政　体	連邦制
首　都	【　　】
面　積	【　　】万㎢
人　口	【　　】万人
言　語	【　　】
民　族	【　　】
宗　教	【　　】
日本との貿易	輸出１億■【　　】 輸入1.9億■【　　】
インターネット利用者数	【　　】人（人口比　　%）

【資料 ③】

熱帯気候地域の学習 例①

ソロモン諸島【　　】

- 1978年、イギリスから独立
- 全土が熱帯雨林気候【　　】…年降水量2000から3000㎜

政　体	イギリス連邦加盟の立憲君主制
首　都	【　　】（ガダルカナル島）
面　積	【　　】万㎢
人　口	【　　】万人
言　語	【　　】
民　族	【　　】
宗　教	【　　】
日本との貿易	輸出1850万ドル【　　】 輸入 370万ドル【　　】
インターネット利用者数	【　　】人（人口比　　%）

- ガダルカナル島で、地元住民 vs 北部のマライタ島からの移住者

　　ＰＩＦ【　　】、平和維持部隊派遣決定

→ 太平洋戦争の激戦地…日本敗戦のきっかけ

【資料 ②】『ジパング羅針盤01』より

ガダルカナル攻防戦

key word

ハラがへっては戦はできないどころか、メシはなくタマもなかった

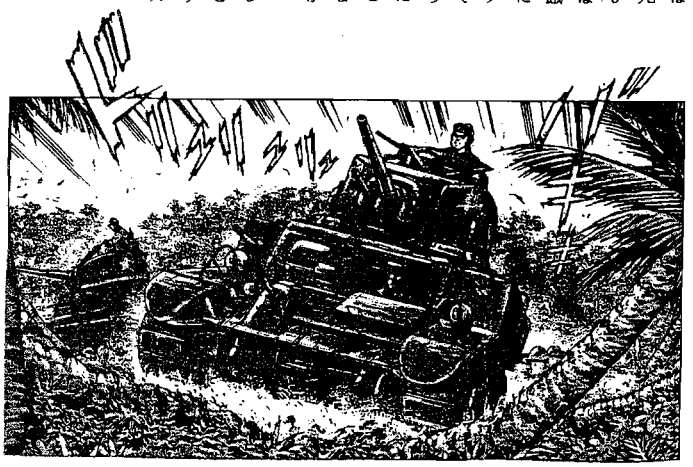
太平洋戦争で、日本軍がはじめて連合軍に大敗したのは、海ではミッドウェー海戦。陸ではガダルカナル島の攻防戦だった。

ガ島攻防戦の発端は、１９４２年７月５日、日本海軍が飛行場建設のため、２５００名余りをこの島に派遣、ひと月後に完成したことにあった。

８月７日の早朝、米海兵隊１万８０００名が飛行場奪取のため奇襲上陸を果たす。もっとも日本軍は、海兵隊の上陸に先立ち、米軍機の空爆と米豪連合艦隊からの艦砲射撃を受けた時点で、早々にジャングルへ撤退していた。

やられたらやり返すのは戦争の常。翌８日夜、今度は日本海軍の第八艦隊（三川軍一司令長官）が出撃、ガ島泊地にひしめき合う連合軍輸送船団と護衛艦隊に夜戦をしかけ、連合軍艦隊に大損害を与えた。その消耗率は66パーセント、生還を果たしたのは10名中３名というありさまだった。しかも、戦死した２万名のうち、実際の戦闘でたおれたのは５０００～６０００名で、あとの１万５０００名は戦病死だった。それもただの病死ではない。飢餓死だったのだ。連合軍に制海権を奪われたために補給物資が満足に届かなかったことと、ジャングルに逃げ込み、煮炊きしようと煙をあげれば、それをめがけて連合軍が空と陸から弾丸の雨を降らせてくるので、食事どころではなかった。のちに『ガ島』を『餓島』というようになったのは、ここに由来する。しかし、現地軍がそれほど悲惨な戦いを強いられているにもかかわらず、陸軍は奪回作戦をやめようとはしなかった。『ジパング』にも登場する辻政信参謀らが強硬にそれを主張したからだ。辻もガ島に行ってはいるが、危ないと知るとさっさと島をあとにしている。陸軍がようやく『転進』という名の退却を決めたのは、２万名余の友軍を見殺しにしたあとだった。そして、この敗戦を境に戦局は連合軍優位に大きく傾く。が、なぜか輸送船団には一撃もくわえず引き上げてしまった。この夜戦を第一次ソロモン海戦というが、なぜ、三川司令長官は艦隊を旋回させたのか？　輸送船団を叩いていたら、以後の戦局は違ったものとなっていたはずだ、とのちに大いに論議を呼ぶ。実際、当艦隊の幕僚らも輸送船攻撃を具申したが、三川司令長官は容れなかった。その後も一切口を閉ざして語らず、理由は今日もなおナゾのままとなっている。

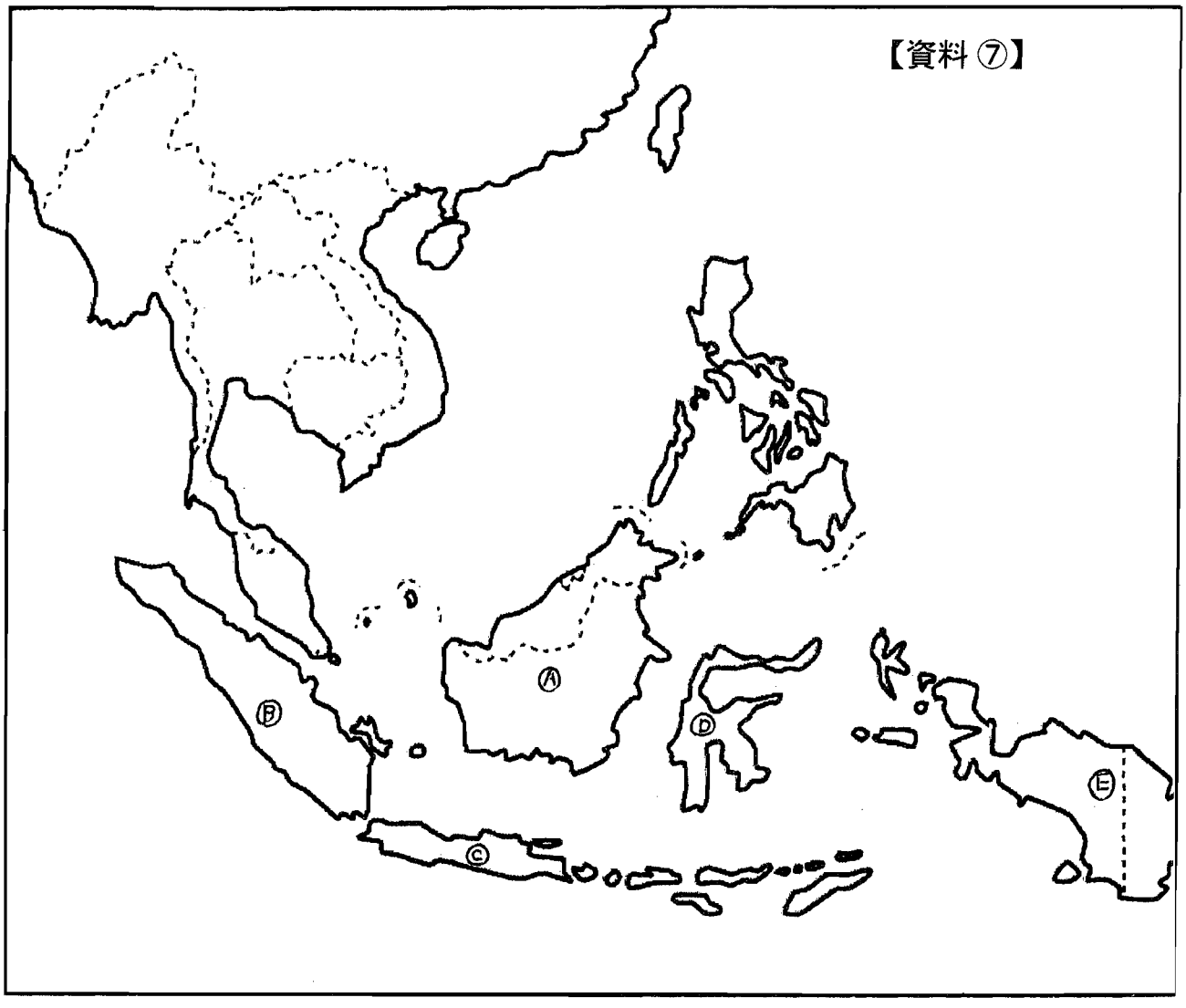
日本軍が連合軍に一矢を報いたのは、この夜戦による反撃だけだった。その後、日本軍は海軍にくわえて陸軍も投入して、ガ島奪回戦に挑むが、圧倒的優勢を保つ連合軍のまえにことごとく敗退する。たとえば、グアムでの演習を終えて帰国途中、急遽奪回命令を受けた一木支隊９００名は18日、ガ島・タイポ岬に上陸を果たす。が、３日後には全滅していた。以後も陸軍は約６か月にわたって、さみだれ式に兵力を投入、最終的には３万名を超える戦闘員を送りこむが、戦力の差はいかんともしがたく、２万名余の戦闘員が戦死する。



【2時間目】

	学習活動	留意点
導入	Ⅰ.「インドネシア」の自然と現状の学習	
	◇「カリマンタン島」の学習の導入として、この島も含まれるインドネシアの地勢と、現在の問題点等を、新聞記事や写真等を用いて学習し、理解させる。	
	・【バリ島の美しい写真(旅行社のパンフレットから抜粋)】を見る ・【資料⑥(新聞記事)】を読む 　・バリ島、スマトラ島 　・世界を震撼させているテロ ・国の場所と、熱帯気候区であることの確認 …【資料（白地図)】使用 　・A～Eの島名を調べる	・観光地「バリ島」について視覚的にもおさえる。 ・テロの記事を用いて、バリ島とスマトラ島についておさえる。テロの背景について触れる。 ・地図帳で国の場所を調べさせ、白地図に色ぬりして確認させる。 ・白地図上のA～Eの島について、地図帳で調べて、記入させる。
展開	Ⅱ.「カリマンタン島」の自然と生活の学習	
	◇ カリマンタンの自然環境が人間生活に与える影響について理解させ、島の開発とそれに伴う人々の生活の変化について考察させる。	
	・【資料⑦(白地図)】の記号Aがこの島であることの確認 ・この島は、3国に属する島であることを確認し、国名と場所を白地図に記入 　・マレーシアのサラワク、サバ州 　・ブルネイ＝ダルサラーム 　・インドネシアのカリマンタン	・三国の領域について、地図帳を用いて確認する。人口や面積、首都、宗教等についてもおさえる。
	・【資料⑧(学習プリント)】に島の特徴をまとめる	・自然環境、熱帯雨林地域での生活とその変化について、理解させる。 ・インドネシアが原油依存から変化していることもおさえる。また、日本との関わりが深いこと、環境破壊の問題についても考察させる。
まとめ	◇「カリマンタン島」の復習問題をやり、熱帯気候区の自然と人々の生活の学習のまとめをする。今後学習する単元である環境問題の予習としても、熱帯林破壊の現状や、それに日本が関係していることも最後に再認識させる。	

【資料⑦】



【資料⑥】

バリ島テロ

副リーダー格逮捕

JI構成員 計画時から関与

【ジャカルタ＝黒瀬悦成】インドネシア国家警察のエルウィン・マパッセン刑事局長は三十日、記者団に対し、昨年十月の同国東部バリ島での爆弾テロの実行犯の一人として指名手配されていたイドリス容疑者(35)を同日までにスマトラ島のメダン市で逮捕したと語った。同容疑者は、実行犯グループの副リーダー格として計画段階から事件に関与し、犯行資金の運搬役などを務めた。

同局長はまた、イドリス容疑者は東南アジアのテロ組織ジェマア・イスラミア(JI)の構成員で、「新たな爆弾テロを計画中だった」と述べた。同容疑者は今年五月、他のJI構成員十人(逮捕済み)とともにメダンで銀行を襲い、約一万四千ドル相当のルピア現金を奪った疑いが持たれており、同局長は、「一味が次の爆弾テロ敢行に向け資金調達を進めていたのは確実」としている。

バリ島テロを巡っては、JIナンバー2のハンバリ容疑者を含む主犯格四人が依然逃亡中。治安当局は、ハンバリ容疑者が今もテロ実行指令を発し続けていると見て、域内の構成員らの動向を厳重に監視していた。

実行犯に死刑求刑

【ジャカルタ＝黒瀬悦成】二百人以上の犠牲者を出した昨年十月のインドネシア東部バリ島での爆弾テロの実行犯、アムロジ被告(40)に対する論告求刑公判が三十日、バリ州地裁特別法廷で開かれ、検察側は同被告に対し、死刑(銃殺)を求刑した。

アチェ州都で爆弾テロ、3人が負傷

インドネシア

【ジャカルタ＝黒瀬悦成】インドネシア国営アンタラ通信によると、スマトラ島のナングロアチェ・ダルサラム州の州都バンダアチェの市場で三十日、手製爆弾二発が相次ぎ爆発し、市場の業者三人が負傷した。国軍が五月十九日から同州で独立派武装組織「自由アチェ運動」(GAM)に対する掃討作戦を開始して以降、州都の民間施設を標的とした爆弾事件は初めて。警察は、GAMによるテロとの疑いを強め捜査している。

【資料⑧】

熱帯気候地域の学習 例③

カリマンタン島

1 自然環境

・面積【　　】万kk㎡

面積世界第3位の島 … 1位グリーンランド、2位【　　】

・北西部～北部 … マレーシアのサラワク州、サバ州

首都【　　】、人口【　　】万人

宗教【　　】、言語【　　】

マレーシア領の中間… ブルネイ＝ダルサラーム

首都【　　】、人口【　　】万人

宗教【　　】、言語【　　】

北東部～南部 … インドネシアのカリマンタン

首都【　　】、人口【　　】万人

宗教【　　】、言語【　　】

・熱帯雨林、気温の年較差小、降水量多い【　　】

・木材資源や石油資源豊富

2.密林の生活とその変化

・陸上交通困難 … 河川が重要な交通路、河川の水位変化

【　　】で、浸水防止、通気性、動物侵入防止

・経済活動

・小規模漁業(海岸の

【　　】林でえびや魚)

・狩猟や採集(山岳部)

・【　　】(陸稲など)

but.1970年頃～変化

・熱帯雨林の伐採　　木材や合板

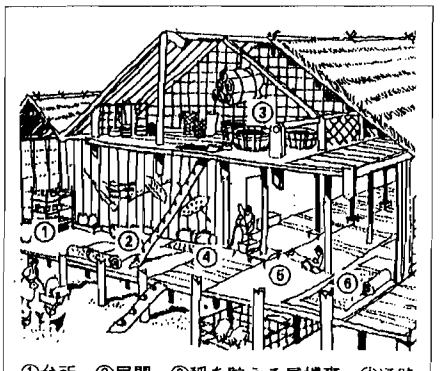
跡地は、ゴムや油やしのプランテーション

・マングローブ林の伐採　　【　　】の養殖場

(教科書P196「えびと日本人」参考)

・石油、天然ガスの採掘(東部)　　奥地やジャワ島から移民増

最大油田は【　　】油田



①台所，②居間，③稲を貯える屋根裏，④通路，⑤共同部屋，⑥客間

3.インドネシアと日本

・インドネシアは【　　】加盟国

・日本はインドネシアから原油関係の輸入多い

・インドネシアから日本への輸出の変化

〔　　〕

インドネシアから日本へのおもな輸出品

1983年	%	1995年	%
原油	55.7	液化天然・石油ガス	25.5
液化天然・石油ガス	25.1	原油	16.9
重油	6.0	石油製品	2.7
木材	3.2	合板	10.0
えび	2.1	木材	3.0
鉱石・地金など	4.9	魚介類(えび含む)	8.9
コーヒー豆	0.7	衣類	2.8
その他	2.3	その他	30.2
計	100.0	計	100.0

4．反省と今後

1．反省 … 二年間の活動を通して、１人で実践することの難しさを痛感した。

(1) 研究仲間がいないため、実践の成果が自己満足に陥る危険性がある。

(2) 毎朝、その日のＨＲあるいは授業のために各紙に目を通し、資料作成をする時間的ゆとりがない。（部活の朝練習や進学朝補習のため）

(3) 授業の副教材として活用したい記事が、うまく見つけられない日が多い。

2．今後

ＮＩＥ活動は終わるが、これからも、新聞を日々の学校教育の中で活用する実践は続けていく。二年間の活動の反省にもとづいて、来期からは他の教師とも連携して、教科全体で協力体制を整えて、新聞活用に取り組みたいと考える。

(1) 今年度も取り組んだ政治経済での新聞作り

(2) 地理における、各国の紹介新聞の作成

(3) 生徒とともに活動している株式会社「しののめ」との連携

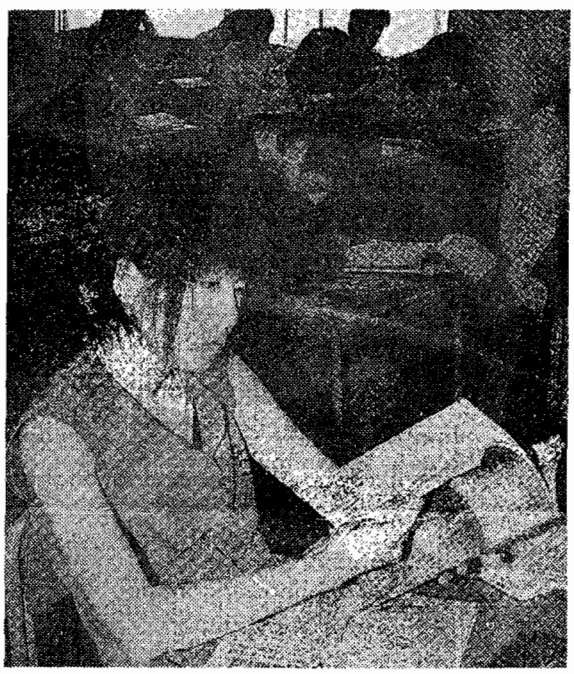
(4) 新開設講座「時事研究」授業での活用

(5) 現代史の戦争学習（松代大本営研究など）との連携

読売　03．8．2

「暗記科目」を身近に理解

社会科の授業の理解に役立てる　**長野東高**（長野市）



大倉教諭が配った新聞記事に出てきた国の位置を地図帳で確かめる

「スマトラ島のアチェで、爆弾テロが起こり、三人が負傷したという記事です」。三年生の地理の授業。インドネシアについて説明するため、社会科の大倉宏夫教諭(36)は最近の新聞の国際面から切り抜いた記事を配って読み上げる。「アチェはどの辺りにあるかな」。生徒たちは地図帳を片手に、東南アジアの白地図に書き込みをする。

昨年度と今年度、相次いでＮＩＥ実践校の指定を受けた。日本史や世界史の授業でも、内容に関連しそうな新聞記事を切り抜いて生徒に配り、資料として使っている。

「授業で使う記事を、手間暇かけて探しています」と大倉教諭。

大倉教諭の狙いは、次の二点にある。まず、日本史や世界史など社会科は暗記科目とのイメージがあるが、記事を読むことで、現代にもつながる身近な問題として分かりやすく教えられる。そして、タイムリーな記事を教科書や資料集以外の「第三の資料」として使うことで、生徒に新聞への興味を持ってもらえる。

生徒の反応も上々だ。地理の授業を受ける松林孝夫君(17)は「輸出品目や人口などの数字や文字を『表』として暗記するだけの授業ではつまらないし、すぐ忘れてしまう。その国について文章で説明する新聞記事を読むことで、イメージがわきやすくなる」と効果を語る。

二学期からは、昨年と同様、朝のホームルームの時間に新聞各紙の社説やコラムを配って、読み比べてみるという。「タイムリーな新聞記事に親しんでおけば、大学入試の面接や小論文にも間接的に役立つのでは」と大倉教諭は話している。